



JSPS London

巻頭特集 今JSPS Londonがオモシロイ!

# 「研究に専念できる環境」 UCL安川氏インタビュー

JSPS London INTERVIEW The 絆

JSPS 研究事業部長・

小山内氏に聞く

2分でわかる!

英国RCの戦略的重点化政策

No.30

JSPS London

# NEWSLETTER

日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター 2011年7~9月 ニュースレター

|                           |   |                                     |    |   |    |
|---------------------------|---|-------------------------------------|----|---|----|
| センター長の視点                  | 2 | JSPS London INTERVIEW The 絆         | 9  | JSPS 小山内研究事業部長来訪                            | 14 |
| 巻頭特集 今JSPS Londonがオモシロイ!  | 3 | JSPS 学術システム研究センター研究員の来訪             | 10 | ぼりーさんの英国玉手箱                                 | 14 |
| JSPS London ウェブサイトリニューアル  | 6 | 平松幸三のご存じですか?                        | 10 | 英国学術調査報告 2分でわかる英国RCの戦略的重点化政策                | 15 |
| Cardiff University シンポジウム | 6 | JSPS London FURUSATO AWARD 2名の採用が決定 | 11 | スタッフ写真館 今月の1枚                               | 18 |
| 知っているようで知られていない           |   | Aston UniversityにてJSPS事業説明会開催       | 12 | Cambridge UK-Japan Young Scientist Workshop | 19 |
| 「ウェールズという『国』」A to Z       | 8 | 佐藤有紀子氏 2年9カ月の勤務を終え帰国、後任は鈴木氏         | 13 | JSPS Programme Information                  | 19 |

## センター長の視点

平松幸三 ロンドン研究連絡センター長



### 多様性と公平性

今年も Times Higher Education (THE) が世界の大学ランキングを発表した。去年は発表の後 THE 主催の World Class University のワークショップが開催され、その招待講演で UCL (University College London) のグラント学長が、大学の順位づけは英国の大学の特徴である「多様性」を損なう、と批判したことはこのニュースレターに掲載した。趣旨は、ランキングの順位を高めようとして、各大学の学長はその判定条件に沿うように大学運営を行なうこととなり、結果的に THE がよかれと想定するように大学が揃っていくからである、と。

たしかに英国社会は多様である。ご存知のように、英国はイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4カ国からなる。これに仏・伊を加えてラグビーの6カ国対抗戦があるほど4カ国の自立意識は強い<sup>1</sup>。サッカーは来年のロンドン五輪に代表チームを出すかどうかで散々もめたあげく、今回はなんとか参加を決めたけれど、これまで長らく英国は統一チームを組めずに五輪を見送っていた。もちろん地方による伝統・習慣の相違なら日本だってあるが、そんなものはイングランドの中だけでも十分に見出される。違いはもっと大きい。たとえばイングランド・ウェールズでは大学授業料が最高9000ポンドに引き上げ

られるのに、スコットランドの大学では郷土出身者は授業料を払わなくてよい。さらにスコットランドの法体系は、イングランド・ウェールズの法体系とは異なり、大陸法の影響が強いというが、同じ国の中で異なる法体系を維持するとは驚くばかりである。

異なるのは法律だけではない。さまざまな行政決定も出先に任されていて、それは地方ごとに異なる事情を考慮するから当たり前のことで、中央の決定を杓子定規に適用したりはしない。

ことほどさように英国では多様であることがむしろ普通なのだが、ここで問題になるのが公平性である。つまり末端で判断すると、担当者ごとに判断に異同が生じて不公平が生まれかねない。このありうる不公平を修正するのが「クレーム」である。クレームといっても、苦情をいうのではない。担当者の判断に満足できないとき、別な誰かの判断を求める手続きである。逆に言うと、クレームをしないなら、担当者の判断に満足していることになる。

民主主義社会で多様性を担保するには、公平性に対する配慮が欠かせない。一方、多様性を認める社会では、個人の自律を前提とした広い行動の自由があって、個人の判断が重んじられる。しかし自由は不平等の源泉でもある。

平等を担保するためには一様にするのが一見よさそうに思える。日本では横並び一線というのが、公平性＝平等を担保

する方法と考えられていて、統一見解によって津々浦々まであまねく決まった判断を適用する傾向にある。だが、横並び一線というのはプロクステース<sup>2</sup>のベッドのようなもので、実態を無視した無理な措置に陥りかねない。

一方、多様性を保持しつつ公平性（必ずしも平等ではない）を担保するためには、実質的な公平の実現が求められる。実質的な公平の実現と口で言うのはたやすいが、手間ヒマのかかる面倒くさい社会になることを避けられない。英国とはそういう社会である、と乏しい経験から受け止めている。平等を実現するに急で、凸凹を均して平らにするのではなく、それぞれの局面で公平をはかるという選択を英国がしたのは、近代に革命も敗戦も経験せずに貴族制を残す国として当然とも言えようか。

実際、英国人は fairness に敏感で、It's not fair! というのはきわめて強い抗議の言葉である。こうは言っても、英国には不公平・不平等がないと言っているのではない。御多分に漏れず、ここにも不公平・不平等は多く存在するが、なるべく fairness を実現しようとする努力が求められる社会、努力している社会である、と思う。「全国一律に」というのは、ある意味で怠慢なのだ。

翻って大学のことを考えると、イングランドには800年とも900年ともいう歴史を誇るオックスブリッジがそびえ立つ中で、後発の大学が2校と肩を並べる

のは遠い夢のような気がする。だからオックスブリッジがトップクラスに来るような評価基準を持ち出して、全国の大学を測るのはむしろ害がある、他の大学もオックスブリッジに追いつくように努力せよとでも言うのか？ と、グラント学長は言いたいのだろう。オックスブリッジには及ばなくとも、それぞれ大学が特徴を出して活躍することによって、英国に、ひいては人類に利益をもたらすこととなる。実際、1826年に創立されたUCLは、オックスブリッジが入学資格を男性・英国国教徒・貴族出身者に限定していた当時、民族、性別、宗教による入学差別を撤廃するという思い切った策を打ち出した。日本にかぎっても、そのお蔭で伊藤博文ら長州藩の5名が幕末にUCLに留学できた結果、彼らをして攘夷思想の愚を悟らしめ、その後のわが国の歴史に多大な影響を与えたのだった。

多様性の価値を説くだけの歴史をこの国は持っているし、また多様性を維持しつつやっっていく自信があるのだろう、とも思う。最後に英国の格言をひとつ。Out of diversity, comes opportunity.

<sup>1</sup> 「アイルランド」は、北アイルランドとアイルランド共和国の統一チーム。

<sup>2</sup> プロクステース：ギリシア神話に登場する鍛冶屋/盗賊。通りがかった旅人を誘い入れ、鉄のベッドに寝かせて、身長がベッドより短いとベッドの長さまで引き伸ばし、逆だと足を切り落としてベッドに揃えた、という。

# 「研究に専念できる環境」 UCL 安川氏インタビュー



抜けるような青空が広がり、夏の日差しを取り戻した初秋のロンドン。文部科学省大臣官房会計課3名が、英国における予算制度・科学技術政策の動向調査のため来英された。英国で活躍する研究者の「生の声」を聞くことは、今後の日本の学術行政に携わる者にとって重要となる。調査の一環として、2010年2月JSPS London 日英シンポジウム開催スキームのオーガナイザーを務められたUCL<sup>1</sup>の安川武宏先生を訪問した。

— 先生ご自身のご経歴や現在の研究内容について教えてください

### 3年程度で日本に帰る選択肢も

東京大学大学院での5年間は、ヒトミトコンドリア病原因点変異をもつミトコンドリア tRNA についての研究をしていましたが、次第にミトコンドリア DNA の複製機構に興味を持つようになりました。博士課程在籍中にケンブリッジで開かれた学会に出席した折、ミトコンドリア DNA の先端的な研究をしている Ian Holt 博士と会う機会に恵まれ、卒業と同時にケンブリッジにある MRC<sup>2</sup> の Mitochondrial Biology Unit (当時 Dunn Human Nutrition Unit) にポスドクとして参加しました。

大学院で在籍していた研究室で先輩達がポスドクとして海外に行くのを見ていたので自分もチャレンジしたいと思って、海外で研究を行うことに対する

心理的な壁はそれ程ありませんでした。

渡英当時は3年程度で日本に帰る心積もりでしたが、2年半～3年くらいで研究が軌道に乗り、良い研究データも蓄積されてきたので数年継続することにしました。4年半くらい経った時には、国際的な環境で独立して研究をしたいと思い、また、海外でもやっていけるという自信がついたので、ポスドクの仕事と平行して独立に向けた準備をしました。

具体的な作業としては、英国内の数カ所の研究機関に対して、CVと研究の抱負を述べた手紙を送りました。うち3カ所から面接やプレゼンテーションの機会を与えられ、結果2カ所からPIのオファーをもらい、最終的にはUCLのWIBR<sup>3</sup>を選び、2007年10月から研究室を主宰しています。

UCLでのPIのポストが約束されたと言っても、給料や研究費は大学から出るわけではありませんでした。そのため、次の

<sup>1</sup> University College London : ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン

<sup>2</sup> Medical Research Council : 医学研究会議

<sup>3</sup> The Wolfson Institute for Biomedical Research : ウォルフソン・バイオメディカル研究所 (UCLの研究所の一つ)



安川 武宏 Dr. Takehiro Yasukawa

University College London, The Wolfson Institute for Biomedical Research シニアリサーチフェロー (グループリーダー)。東京大学大学院工学系研究科化学生命工学専攻博士課程修了後、2002年よりケンブリッジMRC ポスドクフェローに。5年半のポスドク期間を経て、2007年10月より現職。専門は分子生物学、研究対象はミトコンドリアDNA。

ステップとしてこれらを賄うグラントの確保が必要で、UCLに移る前にBBSRC<sup>4</sup>のEarly Careerの(ポスドクが独立するための)David Phillips Fellowshipというグラントを獲得することが出来ました。

#### － 研究現場でのグラントの執行や管理はどのようにされていますか

##### 安心して本来の研究活動に専念

研究費の管理は研究所の事務職員が行っていますし、支払いも全て彼らによって行われています。UCL全体のイントラがあり、買い物もその中で処理されます。研究費の全ての支出は電子化されていますので、研究者自身が立て替えて支出するというのは実質不可能です(学会の参加費くらいでしょうか)。オーダーの発注状況をオンラインで確認することもでき、例えば午前11時までにはオーダーを入れると、同日中に発注してもらえます。急いでいる時などは、私が業者に電話をかけて確認を行うことも稀にありますが、基本的には全て事務担当にお任せしています。

事務職員は長く研究所の業務に携わっていて知識と経験もありますし、研究所のことを熟知していますので、事務手続きについては彼らにお任せして、安心して本来の研究活動に専念することができています。

また、機器の購入に関しては、これまでに自分のグラントで購入した一番高いものでも100万円未満だと思います。高額な機器は研究所として購入します。研究所内では現在13のグループが研究を行っていますが、グループが共同で利用している大型機器の管理には専門の担当者がいて、機器の面倒を見てくれます。共同利用の機器を利用する際には、機器によっては利用料が必要となります(この点、MRCで研究を行っていた時には、無料でした。利用料が必要かどうかは、研究機関によって異なると思います)。仮に、研究所の機器の修理が必要となった場合には、機器担当者が適当な業者に連絡を取ってくれて、いつの間にか修理が完了していたりします。そういう意味では、機器利用料や保守・管理について考えなくてもよい学生にとっては、実験機

器を利用できる有難みというのが実感しづらいのかもしれない。

#### － 研究費の使い勝手はどうか

##### 研究のために効率上がるのであればよし

現在受給しているBBSRCのグラントについて言えば、1年度毎の使用制限というものはなく、グラント期間内であれば自由裁量で年度をまたいで使用することができます。私のほうでは、5年間の総額でどのように使っていくのか考えていけばよいのです。

グラント申請時に何に対していくら支出するのか記載しましたが、資金の割当は柔軟に行うことができます。研究を進めるために効率上がるのであればよしとされていますので、グラント使用においては途中で費目間の流用があったとしても、例外項目はありますが、グラント支給者に対する報告の義務はありません。

研究が申請書で書いた通りに進んでいくとは限りません。多額のお金が必要な時期もあれば、そうでない時もありますから、研究のために使用する経費であれば、ある程度柔軟な執行が認められているのだと思います。

現在BBSRCからのグラントと大学からのグラント両方を受給していますが、毎回どちらのグラントから支出するのかを私のほうで指示して、使い分けています。合算して使うことができるかどうか、建前としてはNGだと思いますが、あまりそういうことを考えなくてよい環境にあります。

#### － 日本の科学研究費補助金の使用にあたっては、不正支出等の防止のためのガイドラインが存在し、説明会なども設けられていますが、英国でもそのような取り組みはありますか

##### 不正支出について深く考えたことはない

先ほどお話ししたように、研究費の支払は事務職員が行い、私が必要と申請する物品を彼らが購入する仕組みであること、また、グラントの執行は研究目的であれば(研究目的でないものを申請することはないですが、しても拒否されるはずです)、ある程度は融通が効くので、不正支出について深く考えたことはありませんし、そのようなことを気にしないで研究に没頭できる環境にあると言えるのかもしれない(「不正」をどう定義す

<sup>4</sup> Biotechnology and Biological Sciences Research Council : バイオテクノロジー・生物科学研究会議



三好 正務  
Mr. Masamu Miyoshi

文部科学省大臣官房会計課管理班主査。国立大学法人化時の北海道大学財務部主計課長、総務省行政評価局評価監視調査官等を経て、2011年4月より現職。奈良県出身。



種田 吉修  
Mr. Yoshinobu Taneda

文部科学省大臣官房会計課監査班監査総括係長。政府調達室、総務班等を経て、2010年4月より現職。京都府出身。



海藤 和俊  
Mr. Kazutoshi Kaitoh

文部科学省大臣官房会計課総務班法規係長。用度班、監査班等を経て、2010年4月より現職。宮城県出身。

るかというの、考え方によると思いますが)。グラントの使い方に関する説明会などは特に受けていません。

現在受給しているグラントの期間は5年間で、契約時に決められた金額でやりくりしていくしかありません。現在のグラントが余ることは考えにくいですが(逆に足りなくなることを心配しています)、余った場合にはもちろんルールに従って返納することになります。

#### 一 英国で研究に従事してよかったこと、困ったことは何ですか

##### ブレイク・スルーのチャンスが多い

英国での研究生活は、いろいろな背景を持つ人と出会う機会が豊富な点が魅力です。

生まれた国によって考えの傾向というか、ひらめきの方向性みたいなものはある程度似通った部分があるのではないのでしょうか。英国で研究を行うということは、国際的な場所、多様性の中で研究を行うということであり、日本人の私には考えもしないような切り口の発想に出会うことができます。言い換えれば、研究を進める中でブレイク・スルーのチャン

スが多い環境に身を置くことができているということ。

国際的な環境の中で切磋琢磨を続けながら一人の研究者として認められたいという強い思いが自分の成長の糧であると信じています。

##### 「This！」で通じる世界

研究者間の会話はデータや話している内容が大事であり、特に理系であれば、データを見せて「This！」で通じる世界。正しい内容や光るアイデアを出せば、相手も一生懸命理解しようとしてくれます。

日英の比較で面白いのが、ディスカッションの時に、こちらの人は話の途中でどんどん自分の意見をかぶせてきます。自分を主張していかなければ、議論の内容について何も考えを持っていない、もしくは興味を持っていないのだと見なされてしまいます。相手の話を最後まで聞いてから自分の意見を述べる日本とは、大きく違いますね。ですから「This」の比喩も正しいながら、議論を理解し自分の意見を伝えられる語学力は欲しい。

こちらで研究をしていて困ったことというのは・・・、特に思い当たりません。

研究者は研究をするためにいます。現

在の研究所にはそれを全うできる環境が整っており、満足しています。また妻の理解もあって、好きなように研究をやらせてもらっています。

妻も働いていますので、家事はある程度分担していますが、休日も含めその他の時間は、やっぱり研究ですかね。そうじゃないと、研究が追いつかなくて。

5年間のグラントも来年には切れてしまいます。研究に集中できる環境が提供され、自分のやりたい研究を自由にやらせてもらえる大学や研究機関を、国を問わず探していきたいと思っています。

#### 一 最後に、英国での研究を志す学生や若手研究者へのメッセージをお願いします

##### 自分の経験を信じて思い切って飛び出して欲しい

海外で研究をしていることがすごいわけではなく、日本でも英国でも、どちらが優れているということもないと思います。英国で研究を行っていても、成果を出せる場合もあれば、そうでない場合もあります。

語学に不安を感じるからといって、研

究環境のレベルを下げても英国に来る必要はありません。日本で良い研究環境にいて、良い研究を行うことができているのなら、妥協して英国に来るよりは、日本で重要な成果を上げることのほうが科学者として大切だと思います。ただ、私は真に国際的な環境の中で研究をし、様々な体験をすることに何にも代え難い喜びを見出していますし、日本では得られない環境もあると思いますので、折角なら語学も研究の傍らに磨いて、ぜひ海外での研究にチャレンジしてもらいたいと思います。

私も帰国子女ではありませんので、言語の不安は十分すぎるほど持って渡英しました。ただ、実際に英国で研究を行っている経験から言えることは、英語がスラスラと喋れなくてもあまり関係ないということ。大事なことは話している中身であって、言葉は後からついてきます。

若いうちは失敗しても修正が効くので、思い切ったことができる時期です。将来英国で研究生活をしてみたいと考えていらっしゃるのなら、ご自分のこれまでの実験室での経験を信じて思い切って飛び出して欲しいですね。

(松尾)



## Recent Activities

### JSPS London ウェブサイトリニューアル facebook ページも新規開設

これまで日英双方の学術研究関係者に向けて様々な情報発信を担ってきたJSPS Londonのウェブサイトが、この9月より新たな機能を備えてリニューアルオープンしました。今回の改修では、既存のレイアウトをベースとしつつ、更新頻度の高いNewsや公募情報などの機能面を充実させ、閲覧中のページに関連するリンクが同じページに掲載されるなど、必要な情報がより見つけやすくなりました。また同時に、facebook ページも新たに設け、ウェブの更新情報を facebook ユーザーにもタイムリーにお届けします。

- ウェブサイトは[こちら](#)
- facebook ページは[こちら](#) 

今後は、これまでのニュースに加え、日本人研究者の受賞情報や過去のJSPS 事業経験者のケーススタディなど、個人レベルの事例も積極的に紹介することによって、日英間の新たなコラボレーション醸成、日本の学術的プレゼンス向上に貢献したいと考えています。

以下、ウェブページ「英国学術情報」の機能を一部ご紹介します。



ウェブサイトをご覧になった方で、JSPS London facebook ページで「いいね！」を押し、かつニュースフィードにコメントをいただいた方には、もれなく粗品を差し上げます。その際は、コメント末尾に「JSPS London 30 を見た」と記載ください。

### Cardiff University シンポジウム【1/2】



シンポジウムのオーガナイザーを務めた Prof. Andrew Quantock

2011年8月18日～19日、“The Cornea and Tissue Engineering” と題した日英共催シンポジウムが Cardiff University にて開催された。本シンポジウムは、6月末の University of York シンポジウムと同様、JSPS London が実施する日英シンポジウム開催スキーム (JSPS 英国同窓会<sup>1</sup> 募集分) で採択されたものである。外国人特別研究員 (欧米短期) のフェローとして 2000 年に渡日経験のある Professor Andrew Quantock, Cardiff University が、当時の受入機関である京都府立医科大学および同志社大学と共催し、角膜・細胞工学の分野から日英の研究者総勢 60 名が参加した。ロンドンセン

ターからは、平松センター長他 3 名が出席した。

18日には、Professor Tim Wess, Head of the School of Optometry and Vision Science, Cardiff University の開会挨拶に続き、平松センター長が挨拶を行った。シンポジウムには、医学・薬理学・理工学分野の研究者が集い、基礎研究から臨床研究、再生医療への応用にまで及び、角膜研究への多面的なアプローチを幅広

<sup>1</sup> 過去に JSPS フェロシップ事業により日本での研究を経験した研究者から構成される同窓会組織。2003年に設立され、2011年現在、会員は 320 名を超える。

## Cardiff University シンポジウム【2/2】



シンポジウム会場となった Optometry and Vision Science School での集合写真

くカバーした発表や、近年の細胞工学研究にフォーカスをあてた角膜研究における最新の研究動向が紹介された。

開会挨拶に続き、“The Stroma & Keratocytes”をテーマとしたセッション、および Ms Watson International Programme Coordinator による JSPS の紹介やロンドンセンターが実施する事業に関するプレゼンテーション、また、シンポジウム期間中には、JSPS London の特設ブー

スにて、JSPS 事業に関心のある研究者にフェローシップなどの説明も行った。

本シンポジウムには、JSPS のフェローシップを利用して日本で研究を行った英国人研究者や、組織的な若手研究者等海外派遣プログラム<sup>2</sup>によって Cardiff University に派遣された日本人研究者が多く参加していた。JSPS の事業によって日英研究者間の密なネットワークが構築されるとともに、それによって築かれた強固な基盤のもと、当該分野における日英間の相互作用がこのような形で生み出されていることを目の当たりにすることができた。Cardiff University と京都府立医科大学、同志社大学からの参加者を中心に、その他の参加大学である University of Reading や University College London 等とも含めて、今後の更なる関係構築や研究の進展が大いに期待される。

ある日本人研究者からの、「国内学会においてもこれほど研究分野が同じで顔見知りの研究者が一堂に会する機会は珍しい」という言葉にもあるように、今回のシンポジウムは、現在の関係からより一層深みのあるフェーズへと進展するものであった。開催期間中のポスターセッションにおいては、和やかな雰囲気の中にも活発な議論が展開された。

夕刻の Public Lecture では、Dr Justyn Regini, School of Optometry and Vision Sciences, Cardiff University により、本シンポジウムテーマと関連させた「視

覚」を通じたモネのアートに関する特別講演が行われた。講演では、白内障の進行がどのように色覚に影響を与え、印象派を代表するフランスの画家クロード・モネ<sup>3</sup>の絵画がどのような変遷を辿っていったのかを学問的に説明するという、大変興味深いものであった。なお、Cardiff University から徒歩 10 分に位置するカーディフ国立美術館 (National Museum & Gallery, Cardiff) は、印象派のコレクションには定評のある、見応えのある美術館であり、特別講演の題材に使用されたモネを始め、セザンヌやゴッホ、ルノワ

ール、マネ等西欧の有名美術家の作品が数多く展示されている。

(松尾)

<sup>2</sup> 我が国の若手研究者等 (学生を含む。) を対象に、海外の研究機関や研究対象地域において研究を行う機会を組織的に提供する事業に対して支援するプログラム。我が国の将来を担う国際的視野に富む有能な研究者の養成を目的とする。

<sup>3</sup> Claude Monet (1840 – 1926)。晩年は白内障を患い、失明寸前の状態にあったこともあり、作品は限りなく抽象に近づいている。1923 年には白内障の手術を受けている。



日本側オーガナイザーの京都府立医科大学・木下教授 (右)、同志社大学小泉教授 (左)

## 知っているようで知られていない「ウェールズという『国』」A to Z

ウェールズは、グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国（以下、英国という）を構成する「国」の一つ。ウェールズ語では“Cymru”と表記され「同胞」を意味します。英国の中でもイングランドやスコットランドと比べて人口・国土ともに小規模な「国」ウェールズ。渡英してもウェールズまで足を伸ばすにはなかなか遠い存在で、日本ではよく知られていません。

ウェールズにおけるここ十数年の大きな出来事といえば、1997年に実施された国民投票の結果、1999年にウェールズ国民議会（National Assembly of Wales）が設置されたことが挙げられます。議員の任期は4年で定員60名、小選挙区比例代表併用制によって選出され、限定的ではありますが立法権も付与されています。このような大きな権限を有するウェールズ国民議会ですが、かつてはイングランドとの間で長年にわたり自治をめぐる戦いを経験し、20世紀初頭まで約400年間イングランドの統治下に置かれていました。

ウェールズとイングランドとの攻防は、11世紀にイングランドを征服したノルマンディー公ウィリアムがウェールズへ侵攻したことに始まります。ウェールズ人は山国の地形を活かし、砦となる城<sup>1</sup>を建てて粘り強く抵抗を続けましたが、最後のウェールズ王ラウエリン・アプ・グリフィズの戦死により、1294年、ウェー



道路サインも英語とウェールズ語が併記される

ルズ全土はエドワード1世による武力制圧を受け、1301年には長子エドワード（後のエドワード2世）にウェールズの君主を意味する「プリンス・オブ・ウェールズ（Prince of Wales）<sup>2</sup>」の称号が与えられました。その後、1536年にはヘンリー8世が合同法（The Act of Union）を制定し、ウェールズが名実共にイングランドの傘下に入ることになります。なお、英国の国旗“Union Flag”にウェールズの国旗だけが含まれていないのは、合同法制定以来イングランドとして扱われており、スコットランドやアイルランドとは事情が異なったためです。

19世紀後半のウェールズでは、18世紀からの石炭・鉄鋼を中心とする産業の発達とともに、労働者階級が大きな成長を遂げます。このような背景から、ウェールズは現在でも一貫して労働党の地盤が強く、1900年の労働党結党以来多くの議員を英国議会に輩出してきました。ウェールズ国民議会でも発足以来第1党を維持しています（表）。

なお、ウェールズでは1979年にも議会設置の是非を問う住民投票を実施しまし

たが、当時は反対多数（賛成243,048・反対956,330）で否決されました。その要因の一つに、20世紀前半から半ばにかけてのイングランドからの大量移民により、ウェールズ語文化が英語文化に淘汰されて独自文化が衰退していたため、ウェールズ人の自治に対する意識が弱まっていたことが言われます。ウェールズでは、The Welsh Language Society（1962年設立）を中心とする文化維持を目的とする団体が熱心な活動を行い、小学校でウェールズ語が必須科目となるな

ど、固有文化の普及が進んでいきました。1993年にはウェールズ語が英語と並びウェールズの公用語として正式に認められました。2001年の国勢調査では、ウェールズ人全体の20.5%がウェールズ語を話すことができると回答しています。国民議会設立の背景には、ウェールズ人が独自文化を再認識するとともに、文化的アイデンティティの高まりも少なからず影響していると言えるでしょう。

（加賀）

【表】ウェールズ国民議会 選挙結果

|          | 第1回<br>(1999.5.6) | 第2回<br>(2003.5.1) | 第3回<br>(2007.5.3) | 第4回<br>(2011.5.5) |
|----------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| 労働党      | 28                | 30                | 26                | 30                |
| ウェールズ国民党 | 17                | 12                | 15                | 11                |
| 保守党      | 9                 | 11                | 12                | 14                |
| 自由民主党    | 6                 | 6                 | 6                 | 5                 |
| その他      | 0                 | 1                 | 1                 | 0                 |

（出典）National Assembly for Wales ウェブサイトより抜粋して編集

※参考文献・URL

Gwynfor Evans, *The Fight for Welsh Freedom*, Y Lolfa Cyf., 2000  
 Welsh Government <http://wales.gov.uk/?lang=en>  
 National Assembly for Wales <http://assemblywales.org/>  
 The Welsh Language Society <http://cymdeithas.org/english/>  
 BBC NEWS Wales <http://www.bbc.co.uk/news/wales/>



ウェールズ国旗

<sup>1</sup> ウェールズには、100を超える城が存在し、戦いの象徴として語られる。特に、カナーヴォン、コンウェイ、ハーレク、ボーマリス（Caernarfon, Conway, Harlech and Beaumaris）は、13世紀に建てられたヨーロッパ中のどこよりも立派な砦であると言われる。

<sup>2</sup> ここで初めてこの呼び名が使用され、以後次期国王として王位を継承すべき英国の王子がこの称号を与えられるようになった。

## JSPS London INTERVIEW

The  
絆  
kizunaJSPS研究事業部長  
小山内氏に聞く

伝えるべきものは形あるものだけではありません。我々が獲得した知識や経験、そして思いもまた次の世代に伝えてゆかなければならないものです。先輩たちへのインタビューを通して、ロンドンセンターの過去・現在・未来へと続く「絆」を手繰り寄せます。

第二回には、6代目センター長、現 JSPS 研究事業部長の小山内優氏にお越しいただきました。

聞き手 齋藤（副センター長）、加賀（国際協力員）

— 赴任当手を振り返って、よかったこと、大変だったことを教えてください。

当時、ロンドンのオフィス賃料は世界一であった上、大家から、次の更新時には大幅値上げをすると打診され、と

でも耐えられる金額ではなかった。まず公的機関の空き部屋を探したが条件の良い物件がなかったので、オフィス探しのエージェントに依頼した。現在のオフィスは、20～30件以上回ってから見つけたもの。条件面は断然よかった。賃料、広さ、使い勝手などの条件以外に、学術関係機関としてふさわしい場所であるかどうかも重要だった。数年たった今もこのようにきれいに使われていて嬉しい。

— 在任時の経験を、その後どう活かされていますか。

英国の大学に関する各種制度の原型や考え方を知ることができた。例えば、間接経費についていえば、英国の大学教授は自身の研究室のバランスシートが常に頭の中にあるように思われる。これまでに大学がいくら自分に投資してくれ、いくら自分が間接経費でリターンしてきたかというものだ。日本の教員にこういう認識をする方は少ないと思う。このような知識は帰国後にも役立った。アメリカの大学制度には学ぶべきところが多いが、スタート地点が違いすぎて、日本の大学運営には参考にならないところもある。他方、英国の大学制度にも示唆に富むところは多い。

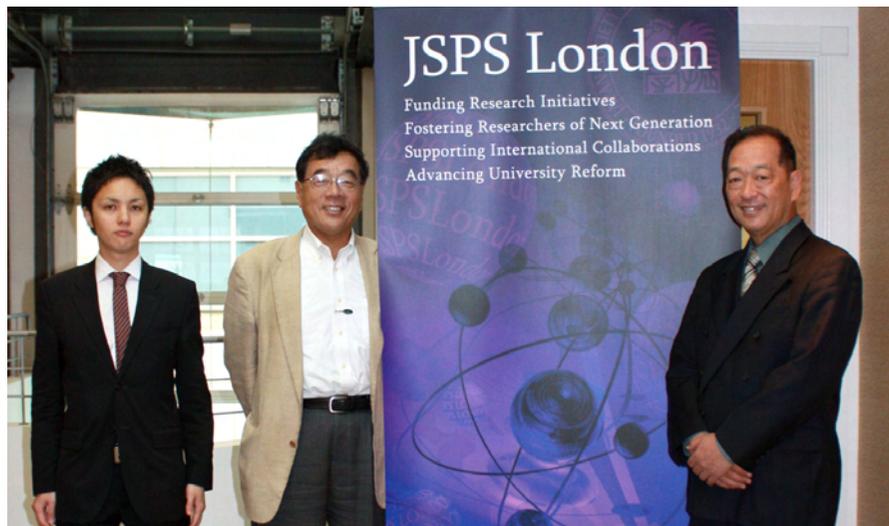
— 先輩からロンドンセンターの果たすべき役割と応援メッセージをお願いします。

英国は、個別具体の政策を官僚に丸投げすることなく、立法関係者や研究者を交えた政策論議が盛んである。その内容は経験主義の国らしく実質的で、大陸諸国に見られるように、単に議論が好きというのとは違う。Royal Societyなどの勉強会を聞きに行き、ご飯を食べながら隣の人と意見交換、ということを積極的にやってほしい。また、日本と同様の島国で、人間同士の信頼関係が重要な国。人脈形成には長い年月がかかる。なるべく長く滞在した方が良い仕事ができるようになる。しかし、現状では、1～2年でスタッフが交代するうえ、前任者がこれまで築いたつながりをそのまま引き継げるような風土ではない。しかし、それだけより多くの人に新しい仕事、クリエイティブな仕事をするチャンスがあるというのがこの組織の特徴。頑張ってください。

【略歴】

小山内 優（おさない まさる）  
1983年文部省入省。省内各局のほか大分県教育委員会、在フランス大使館、放送大学学園での勤務を経験し、2003年政策研究大学院大学教授に就任。2005年 JSPS London センター長に着任する。2007年センター離任後、国際教養大学副学長・事務局長を経て、2010年より現職。

## JSPS 学術システム研究センター研究員の来訪



藤野先生とともに

このたび、JSPS London に学術システム研究センターの藤野陽三主任研究員（工学系科学専門調査班、現・東京大学工学系研究科教授）、木畑洋一専門研究員（人文学専門調査班、現・成城大学法学部教授）が訪問され、研究評価やグラントの審査体制について平松センター長ほか所内スタッフと意見交換を行った。

2011年8月31日には、木畑洋一専門研究員と、英国の新たな研究評価システム「REF (Research Excellence Framework)」について意見交換を行った。HEFCE から各大学等へ配分される研究助成金については、2014年より、現行のRAE (Research Assessment Exercise) に代わり、REF による評価結果に基づき

配分額が決定されることとなる。現在、その制度設計が行われているところであるが、新システムでは、「研究インパクト」が成果指標の大きなウエイトを占めることとされており、その検討内容に研究者の関心が集まっている。

2011年9月21日には、藤野陽三主任研究員と、研究グラントのピアレビューシステム等について意見を交わした。英国をはじめとする欧米諸国と日本のピアレビューシステムとでは、その審査体制や審査過程における申請者への反論の機会の付与といった点で様々な違いが見られるが、各国の文化や組織体制などを踏まえた最適なシステムを検討していくことが必要であると実感した。（高橋）

イーリー・プレースと  
オールド・マイタ・パブ

ロンドン市内チャンセリーレーンの地下鉄駅から程近いところにハットン・ガーデンなる通りがある。そのすぐ隣にあるのが、イーリー・プレース (Ely Place)。ケンブリッジの北方 20 数キロにイーリーなる町があるが、昔、そこの主教の館があったためこの名がついた。この一角はロンドン市長の権限が及ばなかったために、ハットン・ガーデンで悪事を働いた者の逃げ込み先となったりしたという。今では多くの特

平松幸三の  
ご存じですか?

権を失って、主教の館も聖エセルドリーダ教会になっているが、監視権限だけは残っていて、ゲートがあって門番がいる。その路地を入ると 1546 年創業という、こじんまりとしたパブがある。オールド・マイタである。1546 年というと日本では戦国時代、徳川家康が 4 歳だった。このパブの営業免許も 1970 年代までケンブリッジシャーが出していたらしい。ちなみにその教会の建物は、エドワード 1 世 (1239 - 1307) 時代の建築で唯一現存するものである。

## JSPS London FURUSATO Award 2名の採用が決定

2011年9月1日、JSPS英国同窓会会員を対象としたJSPS London FURUSATO Awardの募集を締め切った。幅広い研究分野から14件の申請があり、同月中に開催された審査会で2件が採択された。FURUSATO Awardは2008年度に始まり、日本人研究者との研究協力関係を形成・維持・強化することを目的に、会員の再来日を可能とするプログラムである。今回の募集は、2011年10月から2012年2月までの間に来日する者を対象とする。

FURUSATO Awardは、すべてのキャリアステージからの申請をカバーし、会員と日本側カウンターパートとの関係を強化するのに役立っている。その特長として、申請手続きが比較的容易なこと、申請から結果通知までの期間が短いこと、来日期間の制限がなく各研究者の状況に

応じて柔軟に設定できることなどが挙げられる。申請者の内訳を見ると若手研究者・シニアレベルが全体の8割を占めている。若手研究者の多くは、日本側ホストとの関係構築を行うために利用している。また、教授などのシニアレベルの研究者は、本事業を利用して個人もしくはグループレベルでの共同研究を開始し、JSPS外国人招へい研究者事業やJSPS London シンポジウム開催スキームへの申請につなげている。

また、FURUSATO Awardが同窓会の発展に与えた影響も大きい。会員数は、2008年度比で倍増している。会員の活動に優れたインセンティブを与え、活発なネットワークを形成する手助けになったと言える。JSPS Londonが優秀な英国の研究者と継続的にコンタクトを取ること、日英学術交流ならびに日本のアカ

デミックのプレゼンスを世界的に高める意味で重要な役割である。1件あたり上限2,000ポンドという限られた支援の中で、多くの会員が本事業を最大限に利用し、成果を上げることができれば大変嬉しい。

JSPS London FURUSATO Award  
<http://www.jps.org/alumni/furusato.html>

### 【経験者の声（報告書より抜粋）】

**Dr. John Brazier**  
 Lecturer in pharmaceutical Chemistry,  
 Reading University

派遣先：九州大学大学院薬学研究院  
 派遣期間：2009年8月中旬に2週間

FURUSATO Awardは、外国人特別研究員（一般）時に行った研究を継続させるために大変役立ち、成果発表に必要なデータを取得することができた。帰国後は、さらに強固となった日本側ホスト研究者との協力関係をベースに、日英間の研究者交流を進めるためのコーディネーターの役割を担っている。

**Dr. Steven Hayward**  
 Senior Lecturer in Biological Sciences,  
 University of East Anglia

派遣先：東京大学分子細胞生物学研究所  
 派遣期間：2009年11月中旬に1週間

本事業による訪問では、“developing a protein comparative modelling server for Japan and the UK”をテーマに共同研究を行った。日本側ホスト研究者と直接顔をつき合わせて研究を行うことによって、新たな気づきを得ることが多く、様々なノウハウを学んだ。サポートしてくれたJSPS Londonの事業にとっても感謝している。

**Dr. Irek Ulidowski**  
 Senior Lecturer in Computer Science,  
 Leicester University

派遣先：名古屋大学大学院情報科学研究科  
 派遣期間：2010年10月中旬に3週間

来日中には、“forward and reverse modal logics for multi-threaded computer programmes”の研究テーマについて、日本側ホスト研究者との共同研究を大きく進展させることができた。また、2つの招待講演を行い、ホスト研究者主催のワークショップにも参加した。とても実りが多い訪問であった。JSPS Londonには心から感謝したい。

(Watson)

### 【FURUSATO Award 採択者】



**Dr. Zongbo Shi**  
 University of  
 Birmingham

派遣先：熊本県立大学環境共生学部  
 派遣期間：2012年2月中旬に2週間  
 訪問予定



**Dr. Abbi Hamed**  
 Imperial College  
 London

派遣先：東京大学大学院情報理工学系研究科  
 派遣期間：2011年10～12月の2カ月間訪問予定

## Aston UniversityにてJSPS 事業説明会開催

2011年9月30日、BirminghamにあるAston Universityを訪問し、JSPS事業説明会を行った。JSPS Londonからは、平松センター長他3名が出席した。

事業説明会では、まずProfessor Martin Griffin, Pro-Vice-Chancellor for Research, Aston Universityの開会挨拶及び大学紹介に続き、平松センター長が挨拶を行った。続いてJSPS LondonからJSPSの概要説明及びフェローシップ事業を紹介し、後半には、Aston University所属のJSPS英国同窓会会員2名が、JSPSフェローとして来日したときの経験談を話した。

JSPS事業経験者からは、多くの示唆に富む話を聞くことができた。

1人目のDr Dmitry Nerukh, Lecturer, Non-Linearity and Complexity Research



Dr Dmitry Nerukh

Groupは、外国人特別研究員（欧米短期）として、2005年3～7月の4カ月間、理化学研究所にて研究を行った。プレゼンテーションでは、来日当初は生活面で苦労した部分もあったが、JSPSからの支援を利用して多くの日本国内の研究機関を訪問し、現在でも複数の機関とコラボレーションが続いていること、帰国後も理化学研究所には5度以上訪問して共同研究を続けているという話があった。

2人目のDr Alex Rohzin, Senior Lecturer, Department of Electronic Engineeringは、外国人特別研究員（一般）として、2002年5月～2004年5月の2年間、産業技術総合研究所にて研究を行った（JSPSの支援終了後も同研究所の研究員として1年間滞在した）。プレゼンテーションでは、滞在先の筑波研究学園都市



Dr Alex Rohzin



事業説明会の様子（写真は齋藤副センター長のプレゼンテーション）

について紹介し、帰国後もJSPS Londonが実施するFURUSATO Awardに採択されるなど、引き続き日本との共同研究を続けている模様が話された。また、来年以降には“Photonics and Bio-Medical Engineering”をテーマとした日英間のワークショップを開催する運びであり、現在その準備を進めているとのことである。

また、2名とも、帰国後も毎年のように訪日を重ねて、日本側カウンターパートとの密な研究交流を続けているという話があったが、JSPSの事業がこのようなコラボレーションの継続に寄与していることを改めて確認することができた。最

後の質疑応答でも、フェローシップの詳細や日本での生活面の話など多くの質問があり、説明会を通して日本とのコラボレーションに興味を持った研究者が多く見られた。説明会参加者の中から、一人でも多くの研究者が事業に採択され来日することを願ってやまない。

※ JSPS 事業説明会の今後の予定は

[こちら](#)

(p20「JSPS Programme information」にも掲載)

(加賀)

## 佐藤有紀子氏 2年9カ月の勤務を終え帰国、後任は鈴木氏

2011年7月10日、ロンドンセンターで2年9カ月間勤務した佐藤有紀子氏が、英国での任務を終え帰国した。現在は、慶應義塾大学理工学部で勤務している。後任には、同大学より鈴木隼人氏が着任した。

以下、帰国者・赴任者からのコメントを紹介する。

### 【佐藤氏より一言】

ロンドンオフィスでは、2008年11月から2011年7月までの2年9カ月間勤務しました。主な業務は、交換留学や短期プログラムの運営支援、高等教育に関する調査、広報活動や海外同窓会組織との連携等で、JSPS London内で勤務していたことから研究助成事情について学ぶ事も多く、所内の皆さんにはとても感謝しています。ロンドンでは、調査や日本からの来訪者随行で出張の機会も多く、在任中は9カ国21大学・機関を訪



問しました。出張先では、PCが入ったカバンを落とし液晶画面の半分が真っ黒になったり、パリ・シャルル・ド・ゴール空港では乗換の時間が短く荷物を抱えて走ったりとハプニングが多々ありましたが、振り返ればどれもよい思い出です。帰国後は、慶應義塾大学理工学部配属となりました。国際センターやロンドンでの勤務など、国際系の部署を渡り歩いてきた私にとってはまだまだ修行の日々ですが、理系の部署ということでJSPS Londonで学んだ知識を業務に還元し、日本の学術研究に少しでも貢献できればと思っています。

### 【鈴木氏より一言】

2011年7月より、JSPS ロンドン研究連絡センター内で勤務しております。本オフィスは、日本の大学との交流協定校を含む英国ならびに欧州のトップレベルの諸大学・高等教育機関との様々な教育・研究交流を積極的に促進していくことを目的としています。具体的には、既存の協定校との連携関係の強化、研究者による学術セミナーや講演会の開催、日本からの留学生の学習・生活支援などを行っています。今後は新規協定校の開拓や日本への留学を希望する現地学生に対する広報活動を展開するとともに、英国をはじめとする欧州各国の高等教育機関の最新動向の情報収集にも取り組んでい

きます。今までとは異なる視点から日本の高等教育に目を向け、その現状を把握しつつ、日本の大学のプレゼンスを欧州内で向上させることに貢献できるように、また帰国後には英国赴任の経験を生かせるように日々意識して業務に取り組んでいければ、と考えております。



### 【JSPS における大学の海外活動支援】

JSPSの海外研究連絡センター（以下、センターという。）では、日本の大学等研究機関の海外展開や、以下のような現地での国際交流活動を支援しています。

- ① 大学等が主催するシンポジウムの支援
- ② 共同研究における現地調査に際しての情報提供・後方支援
- ③ 大学改革等に関する海外調査に際しての協力・情報提供
- ④ 大学が設置している現地海外拠点等との連携

また、その支援の一環として、日本の大学等から各センターに職員を派遣し、現地で国際展開のためにスタッフを長期間滞在させることが可能です。利用可能なセンターはワシントン、サンフランシスコ、ボン、ロンドン、ストックホルム、バンコク、北京、カイロ、ナイロビ、計9つのセンターです。ロンドンには、慶應義塾大学の職員が派遣されています。

詳細については、[こちら](#)をご覧ください。

### 【問い合わせ先】

独立行政法人日本学術振興会  
国際事業部 研究協力第一課  
海外センター係

電話 : 03-3263-1792

FAX : 03-3263-1673

E-mail : [overseas-o@jspm.go.jp](mailto:overseas-o@jspm.go.jp)

(加賀)

## JSPS 小山内研究事業部長来訪



2011年7月10日～13日、JSPS 東京本部より小山内優研究事業部長（6代目 JSPS ロンドンセンター長）が NSF 主催のメリットレビュー会議出席のため来英、当オフィスも訪問し、意見交換を行った。2005年7月の同時多発テロ時の安否確認とその対応、JSPS の知名度向上とイベントなどの活動の効率を上げるための広報連絡会議への参加、同窓会イベントを上院議会など由緒のある会場を使って行ったことなど話は多岐に渡った。「当時は、日本の政府系機関が続々と海外拠点をつたんでいた時期。どれだけ自力で、地道に根を張って成果を出していけるかということが重要で、それは今も変わり

ないと思う。あの頃は、地元の人に注目されそうなイベントを、センター自ら積極的に仕掛けていくようにした。ロンドンセンターは、英国の大学や研究機関に対し、事実上、日本の学術・高等教育を代表する立場にあるので、業務のシーズは無限にある。時代によって、日本及び英国の風向きも違う。時代の要請を見ながら、そのときのセンターの方針を定め、これは大事だと思われる仕事をすればいい。センター職員は、その流れを頭に入れつつ、outgoing に動いていって頂きたい。」とエールを頂いた。

(齋藤)

Q 英国でも家に入るときは靴を脱がなければならないのですか？

英国で家へ上がる時には土足で OK・・・と日本では一般的に思われていますが、本当にそうなのでしょうか。もし違ったら赤っ恥をかくことに。

A 日本では、いつ靴を脱ぐ、もしくは履き替えるということが決まっていますが、英国はそこまで厳しくありません。病院などでスリッパなどに履き替えるよりも自分の靴のままの方が、より安全で衛生的だと考える人もいます。

靴についての議論は、文化的思考というよりは実用面で語られることが多いです。例えば、英国では私を含む多くの女性が、長い通勤時間でもできるだけ快適に過ごすためにスニーカーなどのフラットな靴を履き、オフィスでパンプスなどに履き替えています。

プライベートスペースに対しては、異なる考え方が必要です。誰かの自宅を訪問するときには、家主が土足のままでいいと言うまでは自主的に靴を脱ぐように私は助言しています。他人の家に土足で上がることは失礼だという認識は英国でも広がりつつあるからです。家主も、自分がリスペクトされていると感じるので、人間関係を良好に保つきっかけになります。ただし靴を脱ぐ場合、家主がスリッパを出すことは必ずしも期待できないので、どうしても履き替えたい人は「マイスリッパ」を持参することを勧めます。私は、日本から英国に帰国後こう助言するようになり、今では友人や家族も同じようにふるまうようになりました。

日本人の素朴な疑問に英国人ばかりさんが答えてくれます。なにか疑問に感じたら、  
①氏名 ②所属 ③住所 ④質問事項を明記のうえ、ニュースレター編集室  
enquire@jpsps.org まで、お送りください。質問採用者には粗品を差し上げます。

ぽりゃーさんの  
英国玉手箱  
tamatebako



tamatebako

## 2分でわかる英国リサーチカウンシルの戦略的重点化政策【1/3】

## Point

- EPSRC が、限りある財源を集中投資するためのポートフォリオを策定
- EPSRC の戦略に対し、研究者コミュニティからは見直しを求める声も

## Introduction

英国の科学政策は、近年、社会のニーズに対応したイノベーションを誘発させるためのシステム構築へシフトしつつある。その背景には、英国の大学における研究が世界トップクラスであるにもかかわらず、一部の産業しか発展できてこなかったという反省がある。これを打破するため、ボトムアップ型の研究に偏りがちの英国の研究志向は、英国全体の研究ポートフォリオのバランス確保を目指し、社会ニーズ対応・イノベーション創出志向に誘導されつつある。

このような潮流の中、本年7月20日、英国の研究会議<sup>1</sup>（以下「RC」とする。）のひとつEPSRC<sup>2</sup>が、所管する研究分野のポートフォリオを示した“EPSRC’s Research Portfolio 2011”を発表した。EPSRCは、7つのRCの中で最も大きな予算規模を誇り、物理科学からIT、ナノテク・材料、環境技術、医療技術等の広範かつ産業との接点が多い分野を担当していることから、他のRCと比べて課題設定型の研究志向を主導しやすい立場にあると考えられる。

限られた分野を対象とした取組ではあるものの、ファンディングエージェンシーが自らの対象とする研究分野を明確化し、将来的な投資規模も含めて可視化するのには初めての試みであり、このような取組が、将来的に他分野もしくは諸外国に影響を与えていく可能性も考えられる。このため、本報告においては、英国における戦略的な科学研究推進政策のワンシーンとして、“EPSRC’s Research Portfolio 2011”の概要と、当該取組に対する研究者コミュニティの反応を紹介したい。

## EPSRC’s Research Portfolio 2011

“Research Portfolio 2011”は、2011年に策定されたEPSRCのデリバリープラン<sup>3</sup>に示された戦略目標のひとつ“Shaping Capability”<sup>4</sup>を推進する取組として位置づけられている。

今後、EPSRCは、本ポートフォリオに基づき、英国にとって長期的に重要とされる研究分野に対して限りある財源を集中投資していくこととしている。

なお、詳細な説明や投資戦略が公表されているのは、これまでに評価が実施さ

れた一部の研究分野についてであり、EPSRCは今後、全ての研究分野に関する評価を行い、2012年3月31日までに全体のポートフォリオを完成させることを予定している。

以下に、ポートフォリオ作成の経緯やその内容、EPSRCの今後の投資戦略等に関する概要を示す。

## (1) 戦略的アプローチの必要性

EPSRCは、これまで、英国の経済競争力と国民の生活の質の向上に貢献するために、長期的な研究や質の高い大学院教育をサポートしてきた。一方で、激化する国際競争や厳しい財政状況の中で、英国が国際水準の研究力を維持するためには、長期的な視点から重要とされる研究分野に対して戦略的に投資を集中させていく必要があると述べている。

EPSRCは、引き続き、自由な発想と研究者の好奇心に基づく研究を奨励しつ

も、将来的に、全ての投資決定は、国際的な卓越性と国家的な重要性の評価に基づいて実施していくこととしている。

## (2) ポートフォリオの形成

EPSRCは、自らが所管する各研究分野の評価を実施し、ポートフォリオ全体におけるそれぞれの分野への今後の相対的な投資規模について、“Grow（成長）”、“Maintain（維持）”、“Reduce（削減）”の3種類に分類している。

“Reduce”とされた分野は、必ずしも当該領域において研究費の申請を受け付けないということではなく、際立って優れた申請のみを採択する傾向に移行するということを意味している。

研究費の審査において必要不可欠なピアレビューシステムにおいて、審査員は申請された研究の重要性や卓越性を十分に考慮することが求められるため、EPSRCとしては、全ての申請者が、自ら

<sup>1</sup> Research Council. 英国の基礎研究における主要なファンディングエージェンシーであり、実際に研究を行う研究機関でもある執行型非省庁公共機関。分野毎に7つのRCが存在する。高等教育や科学技術施策、イノベーション政策等を所掌するBIS (Department for Business, Innovation and Skills: ビジネス・イノベーション・技能省)より予算の交付を受けており、その管轄下にあると言えるが、RCには自由な裁量権が委ねられており、基本的には、研究プログラムやプロジェクトの実施においてBISの干渉を受けることはない。

<sup>2</sup> Engineering and Physical Sciences Research

Council: 工学・自然科学研究会議。

<sup>3</sup> 英国特有の複数年度予算を受けて、各RCにおいて策定される、同期間の基本方針や投資計画を示す運営計画。

<sup>4</sup> 適材適所を徹底させて、英国が国際的にイニシアティブをとっている研究分野や、国家的に必要とされている研究分野において、質の高い長期的な研究を行うという戦略目標。“Shaping Capability”の他に、“Delivering Impact”（社会的・経済的インパクトの創出）及び“Developing Leaders”（先見性をもって研究チームを率いることができるチームリーダーの育成）という2つの戦略目標が示されている。



2分でわかる英国リサーチカウンシルの戦略的重点化政策【3/3】

研究助成実績、国際的なレビュー、その他報告書等)、関係団体等(戦略的アドバイザーチームや学術関係団体、産業界等)からの助言に基づいて行われている。

評価にあたっては、各研究分野における研究の質や国家的な重要性、国内の既存の研究力が考慮されている。研究の質及び国家的な重要性に関する具体的な評価指標を以下に示す。

●研究の質に関する評価指標

- ・当該研究分野の国際的な地位
- ・変革や破壊生成(transformative or disruptive research)につながる可能性
- ・諸外国との関係において英国の独自性を発揮できるか

●国家的な重要性に関する評価指標

- ・英国経済の発展に資する潜在的なインパクト
- ・新興産業の今後の発展の鍵となる分野として認められるか
- ・英国が直面する社会的課題の解決に貢献しうるか
- ・他の研究分野の発展にとっての鍵となるか

(4) 今後の投資戦略

EPSRCの2014年度までのテーマ別支出計画は下表のとおり。2014年度の予算額は、2010年度と比較し、Resource Expenditure(経常支出)で3%、Capital expenditure(投資支出)<sup>6</sup>で50%の削減率となっている。

EPSRCのテーマ別支出計画

(単位: £100万)

| テーマ   | Baseline   | 年度計画       |            |            |            |
|---|------------|------------|------------|------------|------------|
|   | 2010/11    | 2011/12    | 2012/13    | 2013/14    | 2014/15    |
| Manufacturing the Future  | 74         | 78         | 79         | 82         | 83         |
| Energy  | 104        | 109        | 109        | 109        | 112        |
| Digital Economy   | 24         | 26         | 26         | 27         | 27         |
| Healthcare Technologies   | 74         | 76         | 76         | 76         | 76         |
| Other themes (Living with Environmental Change, Global Uncertainties) | 18         | 17         | 17         | 17         | 17         |
| National capability <sup>7</sup>                                      | 458        | 427        | 412        | 406        | 400        |
| その他 <sup>8</sup>  | 30         | 38         | 40         | 39         | 40         |
| <b>Resource Expenditure (経常支出) 計</b>                                  | <b>781</b> | <b>771</b> | <b>759</b> | <b>756</b> | <b>755</b> |
| Capital expenditure (投資支出)  | 49         | 46         | 35         | 25         | 25         |
| <b>支出合計</b>   | <b>830</b> | <b>817</b> | <b>794</b> | <b>781</b> | <b>780</b> |

(出典) EPSRC "Delivery Plan 2011-2015" より抜粋して編集

ポートフォリオに対する研究者コミュニティの反応

(1) 化学者団体から首相に向けた意見書

2011年8月14日、ノーベル賞受賞者を含む100人以上の世界トップクラスの化学者達が、キャメロン首相に対して意見書を提出した。これは、特に今回のポートフォリオにおいて、合成有機化学の分野が"Reduce(削減)"と評価されたことを受けたものである。

本意見書においては、合成有機化学が様々な分野でイノベーションを誘発し、英国産業の発展に大きく貢献していることを述べ、今回の同分野に対する評価が英国経済を傷つけるとともに、英国の国際競争力に取り返しのつかない損害を与える可能性が主張されている。また、化学者団体は、下院の科学技術委員会にEPSRCの代表者を招へいし、当該分野の評価について詳細な説明を求めるとともに、評価結果を覆すことを求めている。

<sup>6</sup> 英国の予算制度においては、経常的支出に充てるためのResource budgetと、投資的支出に充てるためのCapital budgetが区別され、別々にコントロールされている。

<sup>7</sup> 工学及び物理科学の長期的な分野や学際的な研究を対象とした支援テーマ。当該テーマと課題設定型の「チャレンジテーマ」の予算は、概ね60:40のバランスが設定されている。

<sup>8</sup> プログラム運用経費等。

※化学者集団より提出された意見書は [こちら](#)

(2) 科学・工学関連6団体からEPSRCに向けた意見書

2011年9月19日、王立協会<sup>9</sup>や王立工学アカデミー<sup>10</sup>等の科学・工学分野に関連した6団体が、EPSRCに対して意見書を提出した。

意見書において6団体は、EPSRCが、緊縮財政の中で限られた予算を配分しなければならないという大きな課題を有していることは認めるものの、今回の"Shaping Capability"戦略に係る取組については、一度歩みを止めた上で、より幅広い協議を経て、政策変更が及ぼす影響を熟考すべきであると勧告している。

※科学・工学関連6団体より提出された意見書は [こちら](#)

(高橋)

<sup>9</sup> 1660年に設立された、自然科学分野を対象とした世界最古の科学学会。フェローシップ等による科学者への支援や政策立案者への科学的助言の提供、科学に関するイベントの開催等を行っている。

<sup>10</sup> 1976年に設立された、工学分野を対象とした学会。産学連携を支援するフェローシップや研究アワードの提供等を行っている。



9月下旬には12度くらいまで冷え込むこともあるロンドン。もはや冬へまっしぐらと思いきや、突然の夏日到来に今年最後かもしれない日差しを求める人々が集う。Victoria and Albert Museum の中庭にて。

### Cambridge UK-Japan Young Scientist Workshop

2011年7月22日より、Clifton Scientific Trustが主催する“2011 UK-Japan Young Scientist Workshop”が開催された。このイベントは、日英両国の高校生が分野別に少人数のチームを構成し、ケンブリッジ大学の研究者の指導のもとで研究活動を体験するワークショップであり、日本からは、東日本大震災における被災地をはじめとする各地の高校

や、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）指定校など8校から、23名の高校生が参加した。

ワークショップ最終日の7月29日には、ケンブリッジ大学のKaetsu Centreにて、各チームによる研究成果の発表会が行われ、期間中に得られた成果を英語で堂々と発表する、将来の日本の科学技術を担う研究者の卵たちの頼もしい姿を

垣間見ることができた。一方、発表会後の懇談の際に、「プレゼンの後の質疑応答の際に、日本語でもいいからと促されたにも関わらず、積極的に発言できなかった生徒達の様子に英国の高校生との差を感じ、非常に悔しかった。グローバルリーダーの育成という点で、高校在学時における今回のような経験は非常に有意義であり、今後、国レベルの支援の一層の充

実が望まれる。」と熱く語ってくださった高校教師の声も深く印象に残っている。

(高橋)



研究発表会におけるプレゼンテーションの様子

## JSPS Programme Information

このページでは、JSPSにて実施する国際交流事業やイベントなどを抜粋して紹介します。なお、詳細は各事業ウェブサイトをご覧ください。

### ◆ JSPS が募集する国際交流事業

#### 外国人特別研究員（欧米短期）

欧米諸国の博士号取得前後の若手研究者に対して、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同で研究に従事する機会を提供します。本事業は、JSPS 東京本部だけでなく、JSPS London でも申請を受け付けています。

#### < JSPS 東京本部受付分 >

申請受付期間：2011年11月21日（月）～25日（金）

※申請は年6回受け付けており、次回は2012年1月末の予定。

来日時期：2012年4月～2013年3月の間に来日し、滞在期間は1カ月以上12カ月以内

支給内容：①往復航空券

②滞在費 362,000円/月（事業開始時に博士の学位を有する者）

200,000円/月（事業開始時に博士の学位を有しない者）

③その他（海外旅行傷害保険、渡日一時金等）

申請方法：日本側受入研究者が JSPS 東京本部に申請

採用予定件数：年間計 60 名程度

→ 詳細は [こちら](#)

## < JSPS London 受付分 > **現在募集中!**

募集締切：2011年12月1日(木)  
17:30 必着

※申請は年2回受け付けており、次回は  
2012年3月末募集開始の予定

支給内容：東京本部と同じ

来日時期：2012年5月～2013年3月  
の間に来日し、滞在期間は1  
カ月以上12カ月以内

採用予定件数：年間計25件程度

申請方法：必要書類をJSPS Londonあ  
て郵送により提出。各書類の  
ダウンロードは[こちら](#)から。

※日英交流事業の最新の公募情報は以下  
のページよりご覧いただけます。  
<http://www.jspso.org/funding/index.html>

## ◆ JSPS London イベント情報

### < シンポジウム >

2012年1月5～6日に、“Risky en-  
gagements: encounters between sci-  
ence, art and public health”をテーマと  
したシンポジウムをManchester Univer-  
sityで行います。詳細については、決ま  
り次第JSPS London ウェブサイトに掲  
載します。

また2012年2月10～11日には、  
日英シンポジウム開催スキームで採択さ

れた日英共同シンポジウム(英国側コー  
ディネーターはCancer Research UK 成  
田匡志氏)がCambridge Universityで開  
催される予定です。

※最新のシンポジウム情報は[こちら](#)

### < JSPS 事業説明会 >

JSPS London では、定期的に英国内の  
大学等を訪問しJSPS が実施する事業の  
紹介を行っています。

今後の開催予定は以下のとおりです。

- 2011年11月7日(月)  
Scottish Agricultural College and  
University of Edinburgh
- 2011年11月8日(火)  
University of the Highlands
- 2011年11月9日(水)  
University of Dundee

※最新の開催情報は[こちら](#)。

※所属の機関にてJSPS 事業説明会をご  
希望の場合は、[enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org)ま  
でご連絡ください。

### ◆ JSPS 事業採択者が国際総合 ジャーナル Nature に掲載されました!

2011年7月～9月の期間、科学研究  
費補助金採択者をはじめとするJSPS の

支援する研究のうち、16件がNatureに  
掲載されました。研究分野別では、医学・  
生物科学・工学が多く、他には物理学・  
情報学などの研究がありました。また、  
英国・米国をはじめ海外の研究者と共  
同で発表を行った研究者も多く見られま  
した。

### ◆ JSPS 各種情報を定期的にお届けします!

- JSPS London facebook ページ

facebook ユーザーの方には、公募情報  
や英国学術情報などウェブの更新情報を  
タイムリーにお届けします。facebook  
ページは[こちら](#)から。

- 在英日本人研究者登録システム  
詳しくは[こちら](#)

JSPS London が開催するイベントの案  
内やニュースレターなどを、在英日本人  
研究者の方でご希望の方に送信していま  
す。情報提供を希望される方は、上記  
URL よりご登録ください。なお、対象と  
なるのは、英国の大学・研究機関に所属  
する研究者(ポスドク・大学院生含む)、  
及び在英日系企業研究所の研究者です。

- JSPS Monthly (学振便り)

詳しくは[こちら](#)

JSPS の公募案内や活動報告などを、毎  
月第1月曜日にお届けするサービスです  
(購読無料)。情報提供を希望される方は、  
上記URL よりご登録ください。

(奥村)



事業説明会の様子 (2011年9月30日、Aston Universityにて)

## 編集を終えて

JSPS London に赴任し早 7 カ月。ロンドンでは秋も深まり、コートが手放せない季節になりました。

当ニュースレター 6 ページでご紹介したとおり、JSPS London ウェブサイトに新たな機能が加わりました。より見やすく、旬の情報を新鮮なうちにお届けできるような工夫を施しています。この機能を最大限活かしてくれると期待するのが、今回立ち上げた facebook ページです。ウェブサイトに掲載した情報が、リアルタイムで facebook にも反映されます。現在世界の facebook ユーザーは 8 億人超（英国 3,000 万人、日本 500 万人）。今後の可能性は図り知れません。ニュースレターと併せて、JSPS London ウェブサイトも暖かく見守っていただけましたら幸いです。また、facebook ユーザーの方はぜひ「Like!」にご登録を！

(加賀)



監 修： 平松 幸三  
 編集長： 齋藤 智  
 編集担当： 加賀 涼子



## JSPS London

**日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)**

14 Stephenson Way, London NW1 2HD United Kingdom

TEL: +44-(0)20-7255-4660 / FAX: +44-(0)20-7255-4669

email: [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org)

Website: <http://www.jps.org/index.html>